

## キリシタン布教における琵琶法師の役割について

ホアン・ルイズ・デ・メデイナ  
Juan Ruiz-de-Medina, S. J.

(安達 かおり訳)

はじめに

本報告では、日本人には馴染みの深い琵琶法師を新しいプリズムを通して提示することを試みたい。このことは、室町末期から江戸初期にかけて日本にきたヨーロッパ人が日本の社会をどのように捉えたのかを知る手掛かりとなるであろう。そして、彼らは、琵琶法師による説話の朗詠と音楽について、どのように書き記しているのか考察する。

これは日本のキリスト教と障害者の関係というテーマにもつながるものである。一般に古い日本のキリシタンの共同体では、病氣や障害のある人は常に寛容に受け入れられている。<sup>(1)</sup> 身体であれ精神であれ貧窮した者への宣教師らの関心は、その人々の福音伝道に好意的な反応によつて報いられている。例えば、豊後の病院には、遠くの所領から多くの人が救済を求めてやってきた結果、その人々はやがて外国からの宣教師もたらした宗教の布教者に変えられて、もといたところに還つていったのである。とはいえ、本報告では、琵琶法師という視力を除けば健康な人物に話を絞ることにはしたい。

琵琶法師とは

葉室時長の伝説は（根拠があろうとなかろうと）公家階級の音楽と、その技を教える多くの僧侶たちの存在を世に知らしめた。三世紀の後、ルイス・フロイスは琵琶法師のいささか簡略な像を描いているが、公家は忘れ去られ、代わりに僧侶に言及している。

われわれ（ヨーロッパ人）の間では、貴族はヴィオラを弾くことを誇りとしている。日本ではヨーロッパの手廻し風琴を弾く芸人のように、それは盲人の仕事になつていく。：坊主は楽器を奏すること、歌うこと、武器を使うことなどを教える。<sup>(2)</sup>

ロドリゲス・ジランは詩人の役を盲人だけに限つておらず、琵琶の教師が僧侶だけだったとも述べていない。一六〇七年に彼が書いているところでは、ある異教徒の武士は「公家の子弟らに読み書きと、また楽器の演奏や謡を教えることを職業にしていた。彼は、キリシタンであった生徒の一人にわれわれの聖なる教えについて聞くよう勧められ、よく理解したのでだちに自分の息子一人と共に入信した。彼の「もと属していた」寺の僧侶はそのことを知って、全力をあげてそれを取り消させようとした。異教徒の友人らも同じようにした。この意見にキリシタン

〔となつた彼〕は答えた、その厚意はありがたいが、自分がキリシタンになったのは、日本の宗教はどれも救いをもたらさず、救いはキリシタンの教えにおいてのみあるとわかつたからであり、自分はその教えの下で死ぬであろうと。<sup>(3)</sup>このように、この教師は僧侶ではなく、読み書きを教えているのだから盲人でもない。

僧侶の弟子は「同宿」<sup>(4)</sup>と呼ばれる若者で、通常、盲人ではなかつた。寺院に住み込んでおり、人々は時に彼らを僧侶の見習いである小僧と同じようにみなした。これら同宿の大多数は富裕な家柄の子弟であり、公家の係累も少なくなかつた。

琵琶の演奏を物語りと組み合わせることは、京の宮廷で一三世紀に、おそらくは龜山天皇の子、若き後宇多天皇の治世(二二七五―二二八七)に確立された。盲目であることは琵琶法師の称号を得るための必要条件ではなかつたが、明らかに公家層の芸能を後援しようとする熱意のおかげで、盲人はかなり水準の高いグループを形成していた。その中でも技量の優れた位のものには、室町時代から、本来は宮廷の官吏や仏寺の役職に与えられた検校という名譽ある別称があてられた。ルイス・フロイスはこう記している。

五畿内の領主らは慣習として、屋敷に一人の盲人を抱えているが、それは二つの目的のためである。一つは、彼が歌い楽器を奏でて日本の古い物語を語るのを聴いて、楽しむため。二つ目は伝言を持たせて外へ遣わすためで、盲人たちは一般的にとつても慎重で交渉事に適しているからである。<sup>(5)</sup>

#### 宣教師と琵琶法師との邂逅

薩摩琵琶の普及の度合いに鑑みて、ザビエル、コスメ・デ・トルレスやファン・フェルナンデスと日本の流浪の楽士との出会いは、すでに一

五四九年、薩摩藩の主要な港である鹿児島島の町で起こつたに違いない。一五五一年の春、今度は山口で、ザビエルが日本で最初の教会に作り変えた大道寺という廃寺に、ほとんど盲目の了西という者が、突然(恐らく楽器を携えて)現れた。ザビエルとファン・フェルナンデスは、この若き琵琶法師が生まれたばかりの教会の伝道活動にとつて重要な役割を担っていくことを見抜いた。了西は生月島の向かいにある平戸島の白石という村で一五二五年頃に生まれた。<sup>(6)</sup>

ザビエルの直感的中し、数日後この若き琵琶法師は洗礼を受けてロレンソという名を得、伝道所にとどまつて修道士らと生活を共にし、宣教や公教要理においてよく彼らを助けた。三年後(ザビエルの没後)、イルマン ペドロ・デ・アルカソヴァは彼についてこう書いている。

〔コスメ・デ・トルレスの〕会には一人の日本人がおり、わずかの視力しかないのだが、神のことがらをよく覚えており、パードレにとつて大いなる助けとなつていた。なぜならパードレは何か真剣な議論をしようとするとすぐに彼を呼び、そして彼が十分な認識とわかりやすい表現を会得すれば、パードレは彼に日本人たちに対して説明させるのである。<sup>(7)</sup>

一五五五年頃、了西ロレンソは初めてイエズス会のイルマンの服を身に着けた。一五九三年にメルシオール・デ・フィゲイレドは彼の死をイエズス会総長クラウディオ・アクアヴィヴァに報告している。

日本人のイルマン・ロレンソは、この世において不運な者であり、そのただひとつの目も見えないほどでほとんど盲人であつた。俗世では盲人の仕事、つまり日本の古い物語を歌い奏すること、生計を立てていた。彼は生来の才能と能弁と、それにみすばらしい肉體を持つた人物で、カテキズモでもまた普段の説教においてもすぐれた説教者であることが判明した。ロレンソの宣教により改宗しキ

リシタンとなった日本人の貴族は、ある村の領主であるが、その受け入れた信仰を賛えてこう言っている。「私が神の教えを真実のものとして受け入れた主な理由の一つに、神がロレンソの宣教の言葉に与えられた光輝と恩寵がある。というのは、人間として言えばロレンソのような世間での身分が低く取るに足らない者の話や意見に私が従い、自分の一生をあずけることになるなど、ありえないからだ。」<sup>(8)</sup>

コスメ・デ・トルレスは最初からロレンソを完全に信頼し、一五五五年には、大和の多武峰、梅尾や比叡山の僧院の管長を訪ねるといった極めて重要な仕事を任せた。この任務には、かつて多武峰の僧であったベルナベが同行した。

ザビエルの時代から山口の修道士らと生活を共にしたのは、平戸のロレンソのみではない。後代の記録ではトビアスという八〜十歳くらいの子供がおり、「フランシスコ師が（一五五一年に）洗礼を授けてキリシタンになった哀れな盲人」であり、「子供のときからカーザの中にいた」とされる、これはイエズス会士らと一つ屋根の下で暮らしたことを指す決まり文句である。<sup>(9)</sup>フロイスの日本史に記されている比較的短いトビアスの生涯を読むと、この盲目の子供が、音楽の面でも叙事詩や聖書の物語を語ることも、琵琶法師ロレンソのキリシタンとしての初期の弟子であったことは明らかである。

### 教会内外の音楽のあり方

ここまで二人の盲目のキリシタンの名を挙げたが、彼らが教会の中で自発的に自然発生したかのように思っては事実を見誤ることになる。日本にやってきたヨーロッパの宣教師らは、豊かな伝統のある典礼を寺院の内外で人々の心に届くようなメロデーの形で携えてきていた。これ

らのメロデーや俗謡は、日本人には耳慣れないものであったが、この若き教会の中では最初の頃から好評だった。一五五二年の降誕祭の宵に、日本に到着したばかりのバルタサル・ガーゴ、ペドロ・デ・アルカンヴァ及びドウアルテ・デ・シルヴァは山口でコスメ・デ・トルレスとフアン・フェルナンデスと再会し、祭服は不足しオルガンもない状況にもかかわらず、歌ミサを挙げることに決めた。恐らくこれは日本で挙げられた最初の歌ミサである。アルカンヴァはこのことをある書翰に記している。

雄鶏のミサは以下のように歌ミサが挙げられた。パードレ・コスメ・デ・トルレスはミサを立て、パードレ・バルテザール・ガーゴは助祭としてのアルバとストラを重ね着して、福音書と書翰を朗読し、われわれ（三名のイルマン）は歌って応誦した…。良い声ではなかったが、それを聴いてキリシタンらはいたいへん慰められた…。そして、日本人達は、われわれが歌うことは不快である、と言っているけれども、キリシタンらが神の事柄に抱いている敬愛の念が、われわれの歌を彼らに気に入らせていたようだった。このようにして、彼らは篤い信心をもってミサを聞いた。<sup>(10)</sup>

ヨーロッパの音楽と日本の音楽が違っていること、その演奏法も共通点が少ないことについて、もっと後にフロイスがユーモアたっぷりに描いている。

われわれはクラボ、ヴィオラ、フルート、オルガン、ドセイン等のメロデーによつて愉快になる。日本人にとつては、われわれのすべての楽器は、不愉快と嫌悪を生じる。われわれの間では多声による音楽はよく響き、快感を与える。日本のは皆が声を合わせてわめき、ただ戦慄を与えるばかりである。ヨーロッパの国民はすべて声をふるわせて歌う。日本人は決して声をふるわせない。われわれはポリ

### 教会内で受容された現地の音楽形式

フォニーに合わせて歌う時の協和音と調和を重んずる。日本人はそれをカシマシと考え、一向に楽しまない。：ヨーロッパでは、少年は大人より一オクターブ高い声で歌をうたう。日本では高音部の音が<sup>(11)</sup>階が欠けているので、すべての人が同じ音階でわめき歌うのである。

幸い、自分の伝統を失わないままで新しいものを取り入れるという日本人のよく知られた性質が、音楽においても革新への道を開いた。外国人らの側では、フロイスもホセ・マリア・ヒロネリヤも耳障りと感じたのだが、それでも、日本のメロディーと唱法の型を取り入れる用意があった。コスメ・デ・トルレスは了西ロレンソとの日々の交わりのうちに、

この民衆の音楽により、神話も世俗の物語も、世代を越えて忠実に伝承されていることに気付き、この土地の環境に適応していくための最初の措置を講じた。宣教の当初から、イルマン・ファン・フェルナンデスが土地の専門家に助けられて日本語に翻訳した福音書などを書き写し始めたキリシタンたちがいた。この翻訳の仕事はイルマン・ドウアルテ・ダ・シルヴァ<sup>(12)</sup>に、一五五九年からはパードレ・ガスパール・ヴィレラに受け継がれた<sup>(13)</sup>。詩歌に秀でた日本人らが、さらに聖書の叙述の韻律を整えるという仕事をおこなったが、経験から、聖書の普及はまず口頭でなされるのが成功への道と思われた。木版印刷による本の不足を、新しいキリシタンらの「手で」、「彼らの流儀で」作られた韻文や歌の韻律と吟唱が、効果的に補ったのである。このことは宣教の初期の書翰に繰り返し現れてくる。現地の音楽を取り入れることで、聖書のテキストが新しいキリシタンの記憶にも心にもより良く染み通ったのである。

当地では主の降誕祭は甚だ荘厳に行なわれる。というのも、アダム

からノアまでの物語のような新約・旧約の両聖書中の玄義を多数、「劇にして」演じるからである。その物語は日本語の韻文に訳され、キリシタンはこれをほとんどすべて暗記し、「行列で」歩く時や祝祭において歌う。これは当地の人々が異教の歌を捨て、主の歌を歌うために取りうる最良の方法の一つであり、かくして彼らは聖書の大部分を暗記するようになる。このことは彼らがいっそう信心を深める上で大きな助けとなっている<sup>(14)</sup>。

「降誕祭の」晩餐は他の地方で通常行なっているようなものではなく、夜に公家らが喜びと信心から、聖書中の多くの物語について詩を作って歌った<sup>(15)</sup>。

### 舞台劇における音楽

韻文を用いた劇作手法の導入は日本のキリスト教史の初期から導入された。初めは山口で、のちに豊後で、その音頭を取ったのはコスメ・デ・トルレスであった。彼は以前ランダ(マヨルカ)、バレンシア及びウルデコナ(タラゴナ)の一般学校において子供や青年を教える教師であった。コスメはアイデアをいくつか提示して、後は生徒にテーマの選択とその展開、実際の上演を任せた。イルマン・ファン・フェルナンデスは豊後のキリシタンらの活動を次のような言葉で説明している。

過ぐる「一五六〇年の」降誕祭のおよそ二〇日前、パードレは二、三名のキリシタンに対して、降誕祭の夜、諸人が主において楽しむ何らかの演劇を行なうように言い、何をなすべきか決めていなかったが、パードレはそれを彼らに一任した。彼らは降誕祭の夜になると、聖書により知った事柄に関する数多くの劇を披露したが、これは神を賛美すべきことであった。初めにアダムの墮落と贖罪の希望を演じ、そのために教会の中央に金を塗った数個の実を付けた林檎

の木を置き、その木の下でルシフェルがエヴァを欺いた。これは日本語の歌詞でなされ：墮落の後、彼らは天使によって楽園より追われたが、この内容によってさらに多くの涙を誘い、また「それを演じる」人たちが立派で心がこもっていたため、泣かぬものは一人としてなかった。その後、やがてアダムとエヴァは神が与えた衣服を着て登場し、次いで天使が現れて、贖罪の希望を彼らに与えて慰めた。その後、彼らはソロモンに裁きを請うた二人の女性を演じた。

この劇は、わが子を殺す当国の異教徒の女性を恥入らせる上で好ましいものであり、そのほか聖書に記された多くの事柄を表していた。このいっさいは一人の者が歌って唱え、他の側よりキリシタ  
ンらが応唱して彼が歌うのを助けた。<sup>(16)</sup>

平戸のキリシタンの想像力の対象は聖書だけにとどまりはしなかった。一五六四年の降誕祭には「敬虔な動機に動かされ、創造主を知らぬがために悪魔に従っている日本人の盲目を思つてローマから日本に來たパードレたちの到着を描いた宗教劇が演じられ」、また幕間劇の終わりを「十戒と信仰告白を彼らの言葉で歌つて締めくくつた。その後、他の劇では、生誕のことを耳にして救い主を称えようとする羊飼いらを演じて：楽器を奏で踊りながら、彼らの言葉で聖母とイエス・キリストの歌を歌つた。」

この夜の企画は大々的な成功を取めたようであった。というのは、この地の領主である「籠手田ドン・アントニオとその兄弟の籠手田ドン・フアンは：他のキリシタンらとともにそれは打ち解けた様子で歌い楽器を奏していた。そして優れた歌い手のあるキリシタンに、その場でドン・アントニオは喜びの印として日本の絹の衣を与えたが、彼らが歌つたり演奏したりするのをその場に見に来ることを、彼はまずパードレに許可を求めたものであった。<sup>(17)</sup>」

#### ラテン語典札に対する現地語の補足

このような最初期においては、ラテン語が主であった典札でさえ、多くの日本語による讚美歌や聖歌が補助的に採用され、それに一五六一年にポルトガル人のアイレス・サンチェスが豊後に到着してからは、ヨーロッパの楽器が伴奏をした。

土曜日には聖母の祈りがビオラ・デ・アルコに合わせて歌われ、日曜日と祭日にはまたミサにおいてビオラが奏され、いくつかのモテツトが歌われる。すべては極めて厳かに敬虔に行なわれる。<sup>(18)</sup>

他の場面では楽器の役割は最小限に抑えられた。

イルマン・フアン・フェルナンデスは：スーベルペリティウム（白い上着）と小枝の冠とを着けて先頭を進んだ。彼は大層やつれて足取りも危ういほどであったが、非常に喜んで “Die nobis Maria, quid vidisti in via?” と歌つた。それに対して一人の日本人の老人が呼応して金物の洗面器と棒で音を立てた。というのは、この地には他に楽器がなかったからである。その（一五六三年の降誕祭の）夜の神秘にふさわしく：その（度鳥）教会では人々は一方に男、もう一方に女が合唱の列を組み：旧約聖書からのいくつかの物語を散文の形で披露した。<sup>(19)</sup>

一五六六年の出来事の主役は京都で有名な医師であり、ガスパール・ヴィレラが教会のために「獲得」した教養人であった。彼は「王国の主要都市である堺生まれの名誉ある人で、年齢は五十歳、たいへん才能があり日本の文学にも通曉していた。彼は生地で一家を構えていたが改宗した後はわれらの主に仕えたいと、妻と家と子らを捨て、パードレ・コスメ・デ・トルレスを訪ねてやってきた。島原では異教徒に教養を説くにあたつて私（フィゲイレド）を助け、日曜日と祭日には非常に献身

的に、自他共に精進せんとの熱意を持って説教をした。」一五六六年の四旬節の間と復活祭のために、「われわれの同胞パウロは、日本人が歌うために用いる詩の形式で、キリストの墓をめぐる物語と、そこを訪れてきたマリアラへの天使の返答の物語を日本語で書き上げた。それは：キリシタンの子供たちにより上演され、皆がたいそう満足した。<sup>(20)</sup>」この医師であり文人であった人は養方パウロと呼ばれ、一五八〇年六四歳の時、その息子の一人と共にイエズス会に入った。この息子も都の有名な医師であり、洞院ヴィセンテと呼ばれた。

結果として、書かれた言葉が大量に普及するより先に、話され、暗唱され、歌われた言葉の響きが、初期の乏しい教会の限界を越える働きをしたのである。

これらの歌は人々がずっと歌っている自分たちの歌を忘れさせるようにする。こうしてすでにこの場所では古い他の歌は聞かれず、教会で教えられる歌ばかりである。<sup>(21)</sup>

### 歌による公教要理

ヨーロッパの、特にイベリア半島出身の宣教師らは、平易なりズムとなじみやすいメロデーによる教理伝授に慣れていたため、現地の伝道士に、問いと答えからなる歌による公教要理を示した。これはこの頃には「ドチリナ la doctrina」と呼ばれ、典礼を補佐するものであった。その学習には日本人の子供も大人もすぐれていることが有名な記憶力が役立った。一五六三年の十一月にイルマンで医師のルイス・デ・アルメイダはインドのイエズス会に対し、肥前の口之津と横瀬浦における彼らの活動についてこのように報告している。

当地にはおよそ二〇〇人の子供があり、その内七、八〇人がドチリナ〔を学ぶ〕ために来ている。彼らは裕福な人々の子供なので甚だ

清潔である。：彼らが絶えず歌う歌はドチリナや受難、或いは旧約聖書の物語についてであり、これらを皆彼ら流の調子で〔歌う〕。：私は三人のポルトガル人とともに、口ノ津の港に向かった。：ドチリナが終わると、私は子供たちに、ポルトガル人のため聖書の歌を幾つか歌うことを命じ、およそ七、八名の子供が、彼らの年齢の児童にはこれ以上なし得ぬほどの情感を込めて、アダムと罪から生じる諸悪の話を歌い始めた。同様に、少女らは受難の玄義をたいへん厳かに歌った。：復活祭の日、食事の後で、キリシタンらは都の人のようなたいへんよい衣服をまとって教会を訪れ、神や聖母マリアを讃える数多くの続誦 (pösa) を彼らなりに唱え始めたが、これはわれわれ一同に主における多大な喜びをもたらした。<sup>(22)</sup>

### 独奏者たち

盲人は視力の不足を補って、うらやむべき記憶力と、琵琶の音色と声を用いて他人とコミュニケーションする能力を持っていた。新たにキリスト教徒となった人々は、歓迎の雰囲気の中で自発的にその歌や音楽の能力を教会で発揮するように促された。その中には了西ロレンソのようにすでに名を成した名人もあり、また山口のトビアスや、五感が正常な日田の八歳の少年のように、この技術に馴染み始めたばかりの者もあった。

キリスト教流の語りは歌い手自身が整えた。これら新改宗者の主導によることが常であったが、宣教師らが促す場合もあった。その中にはポルトガル人のガスパール・ヴィレラが抜きん出ている。エヴォラ近郊のアヴィスで一五二六年に生まれた彼は、幼いときからアヴィスのベネディクト派修道院でイルマンらと共に教育され、特に典礼の儀式と声楽の専門教育を受けた。

ヴィレラはすでに一五五六年の日本到着直後、まだ日本語が分からな

いまま、すでにイエズス会士になっていた了西ロレンソの歌う物語詩を聞く機会を得た。一五五九年の九月から京都への宣教の準備に、また一五六一年の小礼拝堂建立の際に、彼を伴った。このつましい礼拝堂で、恐らくヴィレラの声と、疑いなくよりはっきりしたイルマン・ロレンソの声に導かれて、キリスト教の教義に興味を持つひとりの盲目の琵琶法師が登場した。その結果は福音伝道のための新たな琵琶法師の獲得であり、ヴィレラはこの人に洗礼を授け、ホセ(ヨセフ)という名を与えた。彼についてフィゲイレドの書翰にこう読める。

受洗志願者が同(豊後)国のみならず、他の国々からも絶えずあり、そのような中で都の人二名、すなわちルカスとジョセイフがキリシタンになった。：ジョセイフは目の不自由な人であり、当地方の盲人が常にそうするように、歌と楽器の演奏により生計を営むため都から来た。彼は都の身分ある人の子で、：彼がキリシタンになる上で、盲人が彼ら(日本人)の宗旨のため、それに属する話を歌うというのは差障りがあったので、彼は不都合なものをことごとく除くよう身を整えた。したがって、「当初」決めていたような諸国を巡って金銭を得ることを止め、洗礼を受けると、己れの父や親戚を自ら信奉する真理へと導くことを切に望んで直ちに生国に帰った。<sup>(23)</sup>

これらの歌の歌詞や音楽が遺されているかという問いには、否と答えるしかない。その代わりに、その大多数が聖書の物語と聖人伝を語ったものであることは、はっきりとわかっている。一六一一年、イグナティウス・デ・ロヨラの列福のために、ロドリゲス・ジランは「聖人(ロヨラ)をほめたたえる歌が新たに作られ、それらは讚美歌の合間に楽器の演奏に合わせて歌われた」と書いている。<sup>(24)</sup>

盲目の琵琶法師を伝道士に変えることに興味を抱いていたのはコスメ・デ・トルレスとヴィレラだけではなかった。ルイス・フロイスが書いた

一五八六年の年報ではキリシタンでない盲目の琵琶法師に触れ、次いで言っている。

われわれのいくつかの教会でも、彼らがキリシタンになった後は役立っているが、それは「以前とは」違った目的のためで、村々にキリスト教の教義を教えに行き、異教徒らに説教をし、キリシタンに聖人の生涯と神のことがらを語ることである。<sup>(25)</sup>

一五九一年には、別の放浪の芸人たちが教会に接近してきた。フロイスによると、有馬の加津佐で二、三人の盲目の呪術師がキリスト教に改宗したが、それまでかなりのキリシタンを惑わせた者であった。<sup>(26)</sup> フランシスコ・パシオは恐らく彼らのことを念頭に置いて、一五九四年にこう言っている。

「一五」九三年の九月以来、関白殿が都に戻られたので、より自由があると見て取り、役目のあるキリシタンを特別に教育し始めた。：幾人かの盲人を教育して、日本でよくあるように虚しい物語を伝える代わりに、これらの盲人が改宗後の今常に伝え歌うのは、キリスト教の教義の師としてであり、それは村々で教えられる。<sup>(27)</sup>

琵琶法師らの説教は庶民の中から大勢の改宗者を出したが、これから見るように、それは庶民からはかりではなかった。

#### 盲人の組織

キリスト教徒がのこした記録はこの時代の日本にいた大量の盲人について語っているが、一般的に、彼らの人生は、それぞれの家柄の状況によって決定されたと考えることができる。低い身分の琵琶法師は人々の善意に頼って生きていたが、今日ヨーロッパの大都会の地下道に身を寄せているのを見かける乞食楽師と同一視するのは正しいイメージではないだろう。琵琶を奏でて物語詩を歌う盲人は、一六一七世紀の日本の

社会生活に受け入れられた不定期労働者であった。ある者は他の者よりも恵まれており、彼らの間では当然、聴衆と収入源をめぐって妬みや小競り合いがあった。

前出の京都のホセの改宗は、宣教師らが日本独特の別の現実を知るに絶好の機会を与えた。このことについてはルイス・フロイス、フランシスコ・パシオ、オルガンティノー・ソルド、ロレンソ・メシア、ジョアン・ロドリゲス・ジランなどが書きのこしている。

日本では盲人は高く評価されており、古くからの法や特権により盲人の間で一種の君主制のようなものが形成されている。というのは、京都には他のものたちのかしらがおり、この人物は、彼らが自分達の第一人者、上位者と認めている非常に威厳のある人物であるからである。この君主制において、盲人たちは何段階にもわたる位を持っており、能力とこの全員のかしらである盲人の引き立てに応じて、その位を得、昇っていくことにもなるからである。彼はこれらの位を授けるために試験をし、最適な位を与える。そして、彼に与えられる位によって、盲人らは日本中の領主の間で評判と利益を高め、また自分達より下位の盲人を統率する。このことから、彼らは努力してこの権威のある位を得ようと熱望するのである。またそれを得るために、多くの税(貢ぎ物、賄賂)を払う。これらの位で最上位のものは彼らが検校と呼ぶものである。この位を得たものは、それに加えて日本中の領主と同じ名譽ある場所に出入りすることができるとし、その統轄と保護のもとに多くの他の盲人を弟子として抱えており、弟子たちはまた主人のおかげで望む地位に昇っていくのだ。そして彼らは、日本の領主らの間での名声や評判、他の盲人に対しての影響力に加えて、すぐれた交渉役であり、これらの日本の領主らにとって重要な件に際して信頼されており、彼らのところ

でよく迎え入れられ信頼されて居住している。これらの検校の一人が、この度京都でキリシタンになった。彼は極めて尊敬されていて、日本の領主たちにも一目おかれ評判が高く、日本に多くいる盲人のうち三、〇〇〇人近くがその庇護下にあると言われている。彼は非常に思慮深く、日本の法と宗派をよく知っている。この人物によって多くの成果を得ることができるようになり、われわれの主にも願う。なぜなら、彼は権威者であり、日本の領主のところに入り出して、恐れもなくわれわれのことがらについて話すからだ。<sup>(28)</sup>

オルガンティノーが記しているところでは一五九五年には京都だけで四〇人かそれ以上の検校位を持った盲人がおり、巡察師アレックスサンドロ・ヴァリニャーノの秘書であったロレンソ・メシア(一五四五頃〜一五九九)によれば、検校の位を所望するものは、少なくとも年に一回「京都に住むこのかしらである師を訪れる義務があり、その面前で試験され、身につけた知識に応じて、様々な階梯を昇り、そう認められた者にはそれを示す決まった記章、帽子、飾り房が与えられた。この名譽には四〇〇から五〇〇クルザードが費やされ、そうして初めて位を帯びることができた」。<sup>(29)</sup>

公家屋敷におけるキリスト教徒の琵琶法師たち

オルガンティノーもメシアも記述は不完全であり、実にフロイスの調査によると彼らの出費は一、〇〇〇ドゥカード近くにまで昇り、京都に住まう検校が五〇人あった中で、五人がキリシタンで、信者らから経済的支援を受けていた。

一人の盲人が、ミゲルという名でキリシタンになった。彼は前述の侍(信長の孫、三郎殿の代官であるファン)の親類で、良い血筋の者で日本の歴史に造詣が深い。この人は、洗礼を受けてから幾月も



経たないうちに、三郎殿の厚意と援助によって、この検校という名誉ある地位に昇った。五〇人ほどの盲人からなる検校の集団に属していた。昨年すでに書いたように、これらの検校の中には五人のキリシタンがあり、同じキリシタンの厚意により生計を立てているのだが、といって収入が少ないわけではない。なぜならこの名誉ある位を手にするには、一、〇〇〇ドゥカード近く費やすのだから。彼らは領主とも親しく話すことが許されているので、神の教えを大領主らに広めるために、すばらしく適した手段である<sup>30</sup>。

宣教師らの古い書翰は領主の屋敷における琵琶法師というテーマを単独で取り上げてはいないが、他の叙述を補う中で彼らに触れている。こうにして、例えば一五七四年に土佐の戦国大名、一条兼定パウロが山口の盲人トビアスをしばしば屋敷に呼んでいたことがわかる。一五九一年にはある盲人の伝道士が豊前國中津城主の黒田甲斐守〔長政〕ダミアンに個人的に仕えていたし、一五九六年には尾張国清須城主の福島正則がキリシタンの検校に教会を建てるための土地を与えている。

しかし貴人（領主階級）の慈善活動は、並行してありがたくない効果も及ぼし、時には盲人集団の追放にも至った。一六〇三年には肥後国熊本城主の加藤清正の奉行らがある盲人の伝道士を投獄し、結局そのわずかな持ち物を没収して追放した。

キリシタンの武士が多い播磨国の大都市である姫路で起こった事件は、日本社会に典型的なこれらの琵琶法師を取り巻く環境についてわれわれに教えてくれる。事件の主役はジョウムラという男で、洗礼を受けて数カ月後にその同類らの妬みにぶつかっていたのである。ロドリゲス・ジランの話はこうだ。

数カ月前にこの町で一人の盲人がその妻とともに洗礼を受けた。彼は貧しかったので、キリシタンの身分の高い武士や他の者たちが家

に呼んだ。彼を招き、また折々施しをしてやった。そして、日本では異教徒も含めて、だれか近い親類が亡くなったときは故人の魂のために貧者に食べ物を与え、施しを分け与えることが習慣であったので、この町の他の異教徒である貧しい盲人たちが、ジョウムラというキリシタンの盲人が度々招かれ以前よりも多くの施しを得ていることを聞きつけると、ある日突然、三〇人ばかりの異教徒の盲人がキリシタンのジョウムラの家を押しかけ、なぜ彼は故人のためには与えられた施しを彼らに分けることをせざるのか、と、怒り狂って問うた。キリシタンの盲人は答えて、自分はそのような不正は働いておらず、あちこちの家に度々招かれて施しを与えられたのは人が亡くなったからではなく、自分がキリシタンになったので〔他の〕キリシタンたちが折々彼を呼び、招き、生きるための援助をくれるのだと言った。これを聞くと異教徒らはその怒りをキリストの教えに向け、彼がキリシタンになったことをとがめ、何かなんでも取り消すように、さもなければそれ以降彼に施しの分配を認めず、盲人の集団から追放し、この町で今後物乞いをする事も許さない、と警告し脅しつけさせた。とうとう、彼の揺るがぬ心を見て、彼らは彼を盲人の組合（当道、座）から追放した<sup>31</sup>。

盲人らの報復はある程度理解できるが、一六二二年に京都の盲人組織の最高権一六四威者が主役となったもうひとつの事件は、より驚嘆すべきものである。これはマテオ・デ・コウロスが記録している。

この人〔最上位の検校〕は堺に一人のキリシタンの盲人がいると知って、彼に書翰を認めて、彼がわれわれの聖なる信仰を受け入れたことを驚き怪しみ、キリストの教えを棄てて過ぎたあやまちを改めるようにと、そうしなければ、彼の今の位を剥奪し、新たな位に昇る者が支払う中から皆に分配することになっている心付けや定期的な

支給を停止すると書き送った。これを考えるために二日間が与えられた。二日が過ぎると、堺の他の高位の盲人たちが、最高権威者の判断の執行を担って、彼を呼び出すよう命じた。そして結局：彼の位を剥奪し、すべての特権を奪って、もうこの階級の人々が尊敬を払う印(刻)を使うことができないようにした。<sup>(32)</sup>

#### 迫害の中での琵琶法師の活動

一六一四年二月に徳川秀忠が発布した最終的な追放令によって、キリシタンに対する追及は全国に広がり、いくつかの地域では殉教者の列が終わりなく続いた。このような状況下で、修道士や同宿による非合法の布教が続けられ、特筆すべきことに、新たな改宗者もあった。そのかなりの部分が盲目の伝道士の、以前享受していたような自由が常に保証されていたわけではないと言え、特権的な条件に負っていた。

一六一九―二〇年には「加賀の国にはバードレ(ベント・フェルナンデス)がいて、北の「隣接する」能登に高山南坊ジュストの「元の」臣下である大勢のキリシタンらのもとを訪れることになっていた。彼らは：信仰を持ち続けていく新たな力を得た。：われわれからのこのような助けを毎年一回と、またわれらの聖なる教えのことがらをよく会得したキリシタンの盲人によって：バードレから与えられるような：助けを年中得ていた。この良き盲人は自宅の中に祭壇と聖像を備えた礼拝堂を持っている。そこでキリシタンらは日曜日と祭日に集まって祈り、また盲人が神のことがらについて説教するのを聴く。」

キリシタンの都市、長崎ではこれほどの自由はなく、奉行が「この頃、キリスト教の歌をいくつか歌ったというのである盲人を捕らえ、厳しくとがめ立てし、これからは日本の歌だけしか歌ってはならないと命じた。そして一人の婦人にも同じことをしたが、それは彼女の家に他の数人が

祈りと勤行のために集まったからで、彼女を厳しくとがめ、そのようなことはしないで糸を紡ぎ縫い物をするのに時間を充てるようにと言いつけた。<sup>(34)</sup>

ひよつとしたらこの盲人は「日本の物語を歌って生業を立てていたキリシタン」であり、ある売春宿の主人が、病気の娼婦が教理を知って死ぬ前に洗礼を受けたいと望んだのでそれに応じてほしいと呼び寄せたという盲目の琵琶法師であったかもしれない。<sup>(35)</sup>

一六二五年には、長崎奉行長谷川権六(一六一五―二六)のもと、別の盲人が一時的に投獄された。<sup>(36)</sup>一六三〇年には最上の庄内における盲目の伝道士が同じような目に遭った。彼は二名のキリシタン捜索の中で捕らえられ、彼らを自由にするために迫害者の前に自発的に現れたが、結局自由の身になった。<sup>(37)</sup>

#### 殉教者となつた琵琶法師たち

一六二六年、有馬のマンシオの英雄的事件が起きた。マンシオの物語には、残酷な迫害のただ中で、京都の琵琶法師の組織についてこれまで明らかにすることが描かれている。ロドリゲス・ジランのことは引こう。

マンシオという名のキリシタンが：声が良く、この国で用いられる一種のヴィオラを巧みに奏で、その楽器に合わせて日本人に大層人気のある古い物語を歌うので、高来(鳥原)の殿にとても気に入られていた。殿は宮廷に出発する際に、盲人に、ある位を得させたいのでこの年は京都に行きそこで待つように、と言いつけた。この位は、われわれの大学における博士学位のように盲人の間では重要なものなのである。：殿はその位を得るために必要な諸経費を彼に払うことを約束し、それで盲人は京都に上りただちに殿を訪ねること

になった。殿は彼を歓迎し、自分がした約束を覚えている…。しかし、まず彼はキリシタンの教えを棄てなければならぬ、と言った。良き盲人は、礼儀正しく答えて、殿の示してくださいと厚意をうれしく思い感謝していると…しかし、たとえ日本中の収入を与えられたとしても、自分の帰依した聖なる信仰と教えから一歩も後退するとはしない、と言った。殿は彼を翻意させ屈伏させようと…できる限りのあらゆる手を尽くしたが、効果がないことを見て…その場で彼を処刑すべきところだが、自分の領地外であるのでそうしないと云って、彼を冷淡に追ひ払った。「領地に」戻るとすぐに、自分の命令に従わなかったという理由で、彼を殺すよう命じた。<sup>(8)</sup> マンシオが殉教の栄光に浴したかどうかはわからない。宣教師らが書翰で触れている盲目の宣教師らは、多くの場合匿名であることを示唆したが、これら教会の福音活動に優れて貢献した琵琶法師の中には殉教の栄光に浴したことが確認されている者もいる。例えば、一六一九年九月二〇日の金曜日、尾張のギユウイチ・アンドレアは京都の牢獄で殉教し、一六二六年一月一七日、フランシスコ会の盲目の伝道士ショウイチ・ホアキンは米沢で打ち首にされた。

最後に、一六〇五年八月一九日に山口で四つ裂きにされ、殉教している塚のダミアンに触れておきたい。<sup>(9)</sup> フロイスは、彼の人となり之余ところなく記している。姉崎正治氏が利用したフランス語の史料は、その盲人の殉教の地を萩市としているが、彼の殉教は、湯田温泉に近い山口市の樫野川<sup>(10)</sup>河岸に位置する一本松で間違いなく起こった。翌日、キリシタンのベニートが殉教者の腕と頭を見付け、それらを長崎に運んだ。彼の殉教の証拠は、現在日本の司教会議がローマ教皇庁に列福のために提出している一八八名の殉教者リストに彼の名を載せるに至ったのである。

【註】

- (1) この問題についてはすでに何度か論じており、詳しくは拙稿「Los jesuitas y la beneficencia」, *Mon. Jap. III* (Roma 1996) p. 657 を参照。
- (2) L. Fróis, *Contradições e diferenças de costumes entre a gente de Europa e esta Província do Japão* (1585). J. F. Schütte, ed., *Kultur-geschichte Europa-Japan*, (Tokyo, 1955). 所収。フロイス(岡田章雄訳)『ヨーロッパ文化と日本文化』(岩波書店、一九九一年)一七三頁、一部改訳。
- (3) ARSI (Archivum Romanum Societatis Iesu), *Jap. Sin.* 55, f. 421v. fragm.
- (4) Cf. J. Ruiz-de-Medina, "El neologismo 'dejuku' - datos históricos", *Archivum Historicum Societatis Iesu* (AHSI, Roma, 1999). 拙編 *Documentos del Japon 1547-1557*, Apéndice 3. "Djuku, karbô, konomo" 及び *Monumenta Historica Societatis Iesu* (MHSI, Roma 1990) の索引で \*niños の項を参照。
- (5) Fróis, Hirado, 2 de octubre 1587, *Jap. Sin.* 51, f. 33v.
- (6) J. Ruiz-de-Medina, *Mon. Jap.* II, doc. 127&103.
- (7) *Mon. Jap.* II, f. 428.
- (8) Figueiredo, Goa, 20 de noviembre 1593, *Jap. Sin.* 12 II, f. 134.
- (9) Francisco Carrón, Kuchinotsu, 1 de diciembre 1579, *Jap. Sin.* 46, f. 28v.; Fróis, Hirado, 2 de octubre 1587, *Jap. Sin.* 51, f. 33v.
- (10) Pedro de Alarcova, Goa, marzo de 1554, *Mon. Jap.* II, doc. 88 & 88 16-17, p. 56. 東京大学史料編纂所編纂『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』譯文編之二(上)(東京大学史料編纂所、一九九八年)一三三三頁、一部改訳。
- (11) Fróis, *Contradições*, フロイス『ヨーロッパ文化と日本文化』一七三二-一七四頁、一部改訳。
- (12) Cf. Luis de Almeida, Bungo, 14 de octubre 1564, a la muerte de Duarte da Silva, *Cartas Enoira*, 1598, f. 154.
- (13) Cf. Fróis, Miyako, 25 de enero 1565, *Jap. Sin.* 5, f. 204v.; id., Sakai, 30

Junio 1566, *Cartas Évora*, ff. 206v-207.

- (14) J. B. de Monte, Bungo, 9 de octubre 1564, *Cartas Évora*, f. 154. 東光博英訳、松田毅一監訳『十六・七世紀イエスマス会日本報告集』第三期第一卷(同朋舎、一九九八年)一三九頁。
- (15) Fróis, Sakai, 30 de junio 1566, *Cartas Évora*, ff. 206v-207. 東光博英訳、松田毅一監訳『十六・七世紀イエスマス会日本報告集』第三期第三卷(同朋舎、一九九八年)八五頁。
- (16) *Jap. Sin.* 4, f. 21v. versión portuguesa de *Cartas Évora*, f. 79. 東光博英訳、松田毅一監訳『十六・七世紀イエスマス会日本報告集』第三期第一卷(同朋舎、一九九七年)三五五頁。
- (17) Juan Fernández, Hirado, 10 de febrero 1565, *Jap. Sin.* 5, f. 207.
- (18) Juan B. de Monte, Bungo, 1565, *Jap. Sin.* 6, f. 101.
- (19) Fróis, Hirado, 3 de octubre 1564, *Jap. Sin.* 5, f. 116.
- (20) Melchor de Figueiredo, Shimabara, 13 de septiembre 1566, *Jap. Sin.* 6, f. 124.
- (21) Luis de Almeida, Yokoseura, 17 de noviembre 1563, *Jap. Sin.* 5, f. 97.
- (22) Almeida, *ibid.*
- (23) Figueiredo, Bungo, 27 de septiembre 1567, *Jap. Sin.* 6, f. 195.
- (24) Giram, Nagasaki, 10 de marzo 1612, *Jap. Sin.* 57, f. 137 & *Jap. Sin.* 64, f. 98.
- (25) Fróis, Hirado, 2 de octubre 1587, *Jap. Sin.* 51, f. 33v.
- (26) Fróis, *Historia*, V, p. 148.
- (27) Pasio, Nagasaki, 20 de octubre 1594, *Jap. Sin.* 31, f. 92.
- (28) Fróis, Nagasaki, 20 de octubre 1595, *Jap. Sin.* 52, f. 115.
- (29) Lorenzo Mexia, Macao, 15 de noviembre 1596, *Jap. Sin.* 13, f. 129.
- (30) Fróis, Nagasaki, 3 de diciembre 1596, *Jap. Sin.* 52, f. 219.
- (31) Giram, Nagasaki, 14 de marzo 1609, *Jap. Sin.* 56, f. 54.
- (32) Courros, Nagasaki, 12 de enero 1613, *Jap. Sin.* 57, f. 235v.
- (33) Giram, Macao, 10 de abril 1621, *Jap. Sin.* 59, f. 311.
- (34) APT (Archivo de la Provincia S. J. de Toledo), C-286, f. 398.
- (35) Giram, Macao, 15 de marzo 1623, *Jap. Sin.* 60, f. 6.
- (36) León Pages, *Histoire de la Religion Chrétienne au Japon*, 2 vols (Paris 1869-70), Vol. I, p. 603.
- (37) Juan B. Porro, Aizu, 5 de agosto 1630, *Jap. Sin.* 62, f. 246s.
- (38) Giram, Macao, 31 de marzo 1627, *Jap. Sin.* 63, f. 82.
- (39) Giram, Nagasaki, 10 de marzo 1606, (Del martirio del ciego Damian), *Jap. Sin.* 55, ff. 267-274. Relatio de Luis Cerqueira, Nagasaki, 10 de marzo 1606, *Jap. Sin.* 21 III, f. 99. APT *Estimate 2 Caja 103 no. 9-1 & 9-2*.
- (40) Fróis, Katsusa, 20 de septiembre 1589, *Jap. Sin.* 51, ff. 134-137, Fróis, *Historia*, V, pp. 124-133. 一五八九年九月二〇日付、加津佐発、フロイスとロエリヨ共編の日本年報には、堺のダミアンのことが詳述されているが、フロイスの『日本史』にも概ね同文の記事がある。フロイス(松田毅一・川崎桃大訳)『日本史』第一一巻(中央公論社、一九七九年)二七四〜二八五頁。
- (41) ANESAKI Masaharu, *A Concordance to the History of Kirishitan Missions*, (Tokyo, 1930) p. 5.